

教育実習Ⅰ（幼稚園）の報告

広島文教女子大学人間科学部

初等教育学科 准教授 上村加奈

1 はじめに

本学において幼稚園教諭一種免許状取得を希望する学生は、教育実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを段階的に学修する。教育実習Ⅰの履修前に、選択科目である教育実習Ⅶをほとんどの学生が履修するため4段階の学びとなっている。教育実習Ⅰは学内での学修を基本とし、幼児教育の基本にもとづく実践力を養成することを目的としている。続く幼稚園における実習となる教育実習Ⅱを見据えている。そこで、授業のねらいを教育実習Ⅱに臨む前に、教育実践力を培うとしている。

培う力として、①保育の基礎理解・子ども理解②保育指導案を立案する力③教材研究をする力④保育を展開する力（子どもの様子を観察し、実態把握をする力・子どもの実態に応じて働きかける力・集団と個人に対応する力）⑤基礎技能の5点を挙げている。

2 実施のスケジュール

項目	授業回	主な内容
全体指導 指導案の書き方	第1回	オリエンテーション（教育実習Ⅰの位置づけ 授業のねらいと概要・実習資格）
	第2回	指導案立案の要点 模擬保育Ⅰ指導案の内容（6月の指導計画から考える） 指導案検討
	第3回	指導案の立案と書き方（プレゼンテーションによる話題提供 意見交流） 指導案検討
グループ別模擬保育	第4～8回	模擬保育Ⅰ（対象年齢 3・4・5歳児） 指導案検討（5回）
全体指導 中間まとめ	第9回	模擬保育Ⅰのまとめ 模擬保育Ⅱに向けて（年間指導計画から考える） 指導案検討 教育実習Ⅱに向けて
グループ別模擬保育	第10～14回	模擬保育Ⅱ（対象年齢 3・4・5歳児） 指導案検討（3回）
全体指導 学修のまとめ	第15回	教育実習Ⅰのまとめ 教育実習Ⅱに向けて
保育実践		幼稚園における部分保育の実践

3 活動の概要

授業全体を3部構成にして、指導案の立案と書き方、模擬保育Ⅰ、模擬保育Ⅱとした。教育実習Ⅱを見据えて、実習資格を意識して学修姿勢向上に取り組むように指導した。

昨年度から引き続き、幼稚園において子どもの前に立って保育実践（手遊び、弾き歌い、絵本の読み聞かせ）をすることを課した。

1) 授業の概要

①指導案の立案と書き方の学修

これまでの授業で得た知識を基に、指導案の立案と書き方の要点を学修する。2年前期までの学修を基に、子どもにとっての遊びの意味を考えながら指導案を作成する。指導案の役割や書き方は幼児教育課程論や保育課程論の授業の学びと関連させて、段階的に学修できるようにした。

学生の代表者が、立案した指導案をプレゼンテーションし質疑応答や意見交流をすることで、具体的な事項の理解を図った。書き方や保育の流れ（導入・展開・まとめ）の理解を促すことに留まらず、遊びを通して行う保育の本質的な部分を理解するように働きかけた。

②模擬保育Ⅰ

教育実習Ⅱの実施時期である6月の指導計画を基に指導案を立案した学生が保育者役となり、他の学生が子ども役となって模擬保育を行う。模擬保育の後に協議会をもち、実践の振り返りを行った。保育者役と子ども役の両者の視点で意見交流した。

昨年度導入した評価票を修正し、身につけることが望まれる力を基本的スキルと応用的スキルで示した。基本的スキルを①構成力②応答性③表現技術に分け、各項目3～4の視点を示して目指す力を提示した。

模擬保育Ⅰが終了した時点で、教育実習Ⅱに向けての意識づけと模擬保育Ⅰのまとめを行った。本授業が教育実習Ⅱに繋がっていることを意識できるように、教育実習Ⅱの概要と今後の取り組みを提示した。教育実習Ⅱを見据えて、模擬保育Ⅰでの学びの確認と疑問点の洗い出し、模擬保育Ⅱに向けた取り組みを考えた。

③幼稚園での保育実践

模擬保育で子ども役になる力を培うこと、遊びの指導を体験的に学ぶことを目的にして昨年度から開始した。実施は、附属幼稚園において13時から1時間半の時間帯で、手遊びや弾き歌い、絵本の読み聞かせなどを行う。実践内容は、学生が選択し季節や年齢に合ったもの考えることとした。模擬保育Ⅰ終了までに1人1回の実践ができるように計画した。

④模擬保育Ⅱ

模擬保育Ⅱでは、模擬保育Ⅰの学びを踏まえ年間指導計画を基に、実践する月を決めて指導案立案と模擬保育に取り組む。授業後には、学びを振り返って改訂指導案を作成することとした。

2) 保育実践の振り返り集計結果

保育実践後、各自で振り返りをした。集計した結果は次の通りである。（回答率93%）

昨年度の結果と比較しながら考察する。

①実践内容（複数回答可）

2018年度の結果

実践内容	人数
手あそび	31 (77%)
弾き歌い	7 (17%)
絵本の読み聞かせ	37 (92%)

2017年度の結果

実践内容	人数
手あそび	38 (79%)
弾き歌い	12 (25%)
絵本の読み聞かせ	38 (79%)

実践内容については、弾き歌いが減少し絵本の読み聞かせが増加している。今年度は、前期の教育実習Ⅶで絵本の読み聞かせのしかたについて指導し、実践を試みるように促した。一部の学生が取り組み、学びの報告がされたことも要因の一つであると考えられる。

弾き歌いは苦手意識を持っている学生が一定数おり、2年時での実践を選択しない傾向にある。段階的に実践できるように他の科目と連携を図りながら取り組んでいきたい。

②実践を通した学び（学生の記載内容を一部抜粋して掲載）

実践することにより、予想していなかった子どもの姿を発見して学びに繋がった様子が見てとれた。達成感を味わった内容では、応答的に関わりながら保育することができたことが挙げられる。模擬保育Ⅰにおいて、学生は応答的な対応に難しさを感じていた。保育の基本的な進め方であるため、幼稚園での実践で保育技術をつかめたことは今後の実習に繋がる成果である。

《子ども理解》

- ・手遊びを準備していたが、違うものがやりたいと言われた。何も考えていなかったで、そのまま続けてしまいました。想定外のことが起こるのが当たり前だと思っておかないといけないと思いました。
- ・絵本の読み聞かせで、笑うだろうと思っていた場面では真剣に聞いていたり、笑うと予想していなかった場面で笑ったりなど予想外のことがあり驚きました。
- ・絵本を見せた瞬間にたくさんの子どもの本知っとなるよって反応してくれて、絵本を読んでいるときも絵本を指差して呟いていた。真剣に聞いてくれている子どももいれば集中力が切れている子どももいた。
- ・自分が思っていたよりも子どもたちが実習生の話をきちんと聞いてくれていて驚きました。縦割り保育だったので、しっかりしている年長さんが年中さんや年少さんを注意したり、年長さんの真似をしたりしているため、活動に集中して取り組んでいたのかなと思いました。
- ・絵本を読んでいる時に、子どもたちを見ると年長児と年中児はきちんと聞いていた。年少児は、途中で上の空の子が多く見られた。
- ・私が行った手遊びや絵本を、子どもたちは何度もやっていて最初は「いやだ、やりたくない」と言われてしまい、困りました。すると、年長児の男の子の「やろう！」の一言でやりたくないと言っていた子どもたちも「やろう！」と言ってくれ、最終的にはみんな笑顔で笑いながら手遊びをしてくれたため、お友だちの偉大さを知りました。

子どもの実態把握と年齢による発達や個人差の理解、子ども同士の関係理解をしている。子どもの前に立つ経験から、子どもの反応を予測すること、想定外のことが起きた場合の対応を考えておくことを実感している。

《保育実践》

- ・ちょうど年長組が芋掘りをした後だったので、絵本に興味をもった。ページをめくる前の次はどのようなのだろうとワクワクしているような顔を浮かべている子がいて自分自身も楽しかった。弾き歌いの前に交互唱をしてそのまま伴奏入りで弾き歌いをしたのが子どもたちが歌いにくそうだったので、わかりやすく後ろを振り向いて「どうぞ」と言ったり、子どもが立っている位置を声かけで変えたり、体ごと子どもに傾けるなど、考えればできた配慮もあったので、次からはそのことも考えて弾き歌いをしたいと思った。
- ・興味があるものに対してはとても前のめりで反応してくれるし、楽しみにしてくれていることが伝わってきました。その一方で時間配分が難しいなと感じました。時間が短すぎると物足りないし、長すぎると飽きてしまい子どもたちのためではなく、保育者のためになってしまうと感じました。
- ・絵本を読んだ時には、集中して聞いてくれる子も多かったが、絵本の中の面白い言葉を見つけると友達と話したり笑って聞いていかたりした。あまり興味を持っていないような子もいたので導入やその都度の言葉かけが大切だと感じた。手遊びは、最初やりたくないと言っていた子もいたが、やり始めると楽しそうにしていたので保育者の表情や子どもたちを巻き込むような楽しさを表現することが大切だと感じた。
- ・思ったより子どもたちが注目して聞いてくれたため、練習したことが全部できました。さらに時間があり反応がよければやろうと思っていたことも全てできたのでとても充実した時間になったと思います。短時間の中で「導入」「展開」「まとめ」がしっかりできて子どもたちからもたくさんの感想を聞くことが出来てとても自信になりました。
- ・私を読んだ絵本はシリーズがあり、子どもに「他のお話もあるから今度見てみてね」というような言葉がけをして、子ども達が「おれ探す」「読んでみたい」言ってくれて興味を持たせる言葉がけができたかなと思った。
- ・絵本の読み聞かせの際は集中して静かに聞き、手あそびの際は色々な意見を出しており、その子どもたちの意見を取り入れながら進めていけたため、間ができて子どもたちのやる気が薄れるという事態にならなかった。
- ・想定外のことが起きた時に対応出来ず、やらせてしまう形になってしまいました。想定外なことが起きた時、

柔軟な対応ができるようにしないといけないと思いました。また、何個もレポートを持っておかなければ対応できないと感じた。

・絵本が長かったこともあり集中力が切れている子どもがいたのもうすこし感情を込めて読むことや、絵本の中に出てくる会話が あったら登場人物になりきって読めるようにしたいと思った。後ろの方まで絵本が見えなかったら面白くないので座る位置も考えたいと思いました。

・絵本の持ち方と向き、年齢にあった絵本選びが課題です。読んでる最中に気がついたら傾いていたり、子どもたちから見えにくくなっていたりして何度も直していたので、直すのではなく常に意識しながら読みたいです。また今回は異年齢児が対象だったためどの年齢に合わせるかを考えないといけないと感じました。

子どもの反応から、教材選びや援助のしかたについて課題を見つけたり、今後の取り組みを考えたりしている。どの学生もたくさんの気づきを記載していた。自らが気づくということが学習意欲につながっている。

4 成果と課題

1) 子ども理解

保育において子ども理解が基本となる。子ども役をすることで、子どもの実態に目を向けさせるようにしている。教育実習Ⅶや幼児教育学演習Ⅱでの学びを関連付けることで、子どもの実態に目が向くようになっている。本科目の幼稚園での保育実践によっても、子ども理解が深まっている。それは、模擬保育中の学生の姿から見て取れる。発達や個人差を表現しようとし、活動に積極的に取り組む子どもや興味を示さない子ども、苦手意識のある子どもなど、個別の対応を要する子どもを演じられるようになっている。しかし、3歳児を演じる学生の姿にはあまり変化が見られず、3歳児の実態とかけ離れている。3歳児の思考や言動を理解することは難しいようである。教育実習Ⅱにおいては、3歳児とのかかわりも課せられる。3歳児を理解し援助を考える工夫が求められている。

2) 模擬保育Ⅰでの学びを模擬保育Ⅱに活かす

個々の取り組みとして、毎回の授業の学修記録に2～3のキーワードを挙げて、学修内容を振りかえるようにした。担当教員が内容を確認し、重要な点に赤線を入れて返却した。10回の記録内容を見ると、段階的に各回で学びの要点がとらえられるようになっている。

全員の取り組みとしては、模擬保育Ⅰの実施後、中間まとめを行った。学生の振りかえりには、子どもの実態を考慮したねらい設定の難しさが挙がっていた。指導案作成に取り組むなかで、遊びを考える際に子どものどのような実態を把握しておかなければいけないかを掴むことができていた。設定したねらいを活動の中でどのように反映していくのかについては、2年後期段階での理解であり継続した指導が必要となる。授業の最終回で展開部分の充実のしかたについて指導して、教育実習Ⅱにつないだ。

教材研究の重要性が実感できていた。子どもにとって本活動の意味を考えながら、教材作成を模索していた。模擬保育後の協議で改善案の手がかりをつかんだ学生もいた。実践においては、表情や話し方などについて意識をしても思ったように出来ないことを痛感していた。中間まとめを経て、模擬保育Ⅱでの成長が見られる学生もおり、課題意識を持ちながら実践することで技術の向上が見られた。立案と実践、振り返りと改善を繰り返すことで体験的な理解となって学びが深まっていた。

指導案作成と保育実践という点では、核的科目となっているため授業内容を精査し改善に努めて、学修効果をあげていきたい。